

社會形象の客觀性と社會關係。

講師 中野清一

小 序。

私のこの小論は社會形象の本質的屬性をなすと考へられる客觀性の態様とその根據をたづね、社會關係がこの如き客觀性をもつ社會形象と如何に連絡してあるかを跡づけやうとする。別様の表現を與ふるならば或學者の所謂『間接關係』の態様を一般的に瞥見しようとする(註)。而して議論の進め方はこうである。私はまづ『間接關係』といふ表現の下に何が意味されてゐるかを考ふる事から出發しよう。この事を考ふる事はこの小論のとりあげてゐる如き問題の起り來る所以を知るに役立つてくれやう。進んで私は社會形象の客觀性とは如何なる姿を意味するものであるか、又この様の姿は如何なる生の構造の上に可能づけられてゐるのであるかを考へてみよう。それが終ればこの

如き客觀性を有する社會形象と社會關係とは如何に連絡づけられて考へらるべきであるかをたづねてみよう。關係學派の見地からして社會形象が如何に取扱はれてゆくべきか、又それに對する私の解答とこの小論における議論とはどう關聯するのであるかについては別に稿を改めて取上げよう。

註。Richard Müller-Frieffels: Allgemeine Sozial- und Kultur psychologie. 1930.

一、『間接關係』と『直接關係』。

私はこの夏、社會關係が社會形象を通じて營まるゝか否かによつて『形象關係』と『直接關係』とに區別しておいた。而して具體的な社會生活における社會關係の大部分は『形象關係』である事をも説いておいた。(固より概念的には社會關係の本質なり態様なりの考察は社會關係が直接に營まるゝか否かのいはゞ具體的な道行の問題から全く獨立に見定められよう。私はこれを否定するものではない。唯然し私の云ひたく思ふ所のものは具體的な道行の如何を考ふる事から獨立に社會關係の本質なり態様なりを見定めねばするが、見定められた社會關係一般に關する理論は如何なる道行の場合にであらうと妥當しうる丈の強さにあねばならぬといふ事である。) 私は進んで『形象關係』といふ表現の下に私の意味する所を述べるに先だつてフライエンフェルスの最近の著作に表れた『間接關係』と『直接關係』との區別を考へてみる。

彼は彼の心理學に於けると同様に社會學に於ても『全體觀察』の必要を強調する。而して社會生活を全體的に見る限り、社會學の基礎概念は社會關係のそれに非ずして社會形象の概念であるといふ。如何なる理由によつてあるか。彼の社會形象の概念は關係に入り組む人々（集團）のみならず、これらの人々の生活が生む客觀化者をも合せ含む。而してこの兩要素の綜合が（この綜合は社會形象を意味する）人間の社會生活を特色づけるものと彼は考へるからである。如何なる意味合ひに於てこの綜合が人間社會を特色づけるといふのであるか。彼は社會形象の『構成的特質』を擧げて四とする。第一に綜合化又は全體化、第二に分化又は肢節化、第三に具體化又は物象化、第四に抽象化又は觀念化。中に就いて第一及第二は人間社會のみに現れるものに非ず、充分な意味に於て動植物の社會にも存するものであるが、第三のものは動物社會に於て粗雑な姿をもつてのみ現れるものであり、第四のものに到つては全く人間社會に限らるゝ。然し人間社會の特質を考ふる場合、彼の着眼は以上の第三、第四の契機のみ注がれてゐるものではなくして上の如き四契機の綜合が齎す特質の上に向けられてゐるとみななければならぬ。

斯くして彼の社會學の第一次的な基礎概念は社會形象の概念である。然しこの事の故に全く社會關係の概念を彼が放擲しつたものとみるのは當らない。社會關係の概念は二次的のものである。

が猶本質的なものである事を失はないといふ。二次的のものであるといふ意味は社會關係は綜合的な社會形象概念の裡にその一契機として含まれるといふ事柄を現したものであらう。二次的のものながらに本質的のものでありうるといふ意味は綜合的な社會形象の概念を基礎觀念としつゝ具體的な社會生活の觀察に臨んでゆく場合、社會生活の物象化者、抽象化者も、社會關係も等しき重要さに於て考察にいりくむといふ事柄を指したものであらう。

さてこの様の意味合ひに於て彼の社會學組織の裡にとりいられる社會關係の概念は從來の見定めよりもより廣く措定されねばならぬといふ。即ち社會關係の概念は人際關係のみならず、人間と動物、人間と事物との間の關係をも合せ含まねばならぬといふのである。私は煩雜をおそれて後の種類の關係が如何なる意味合ひに於て社會關係たりうるかをたづねずにおかう。何れにしてもかく廣汎に措定された社會關係に就いて『直接關係』と『間接關係』とを分ちうると彼は考へる。『直接關係』といふのは客體的なもの、媒介を経る事なき直接の關係をいみする。『間接關係』といふのは人際的な關係が客體的なものへの迂回を経て營まるゝ場合をいみする。茲に注意すべき事は『直接關係』と『間接關係』との區別は『人際關係』と他の社會關係の區別と相蓋ふものに非ざる事である。尠くとも私は彼の行論のうちにはこの印象を受けとる。

一步を進めよう。『間接關係』は社會關係一般の大部分の場合を占むるものでありながら、從來社會學的にそれが注目される事淺かつたのを彼は難じてゐる。この點は私自ら後にとりあげよう。彼は『間接關係』の意味する所についてこう考へる。二人の人が共通にある對象を希つたり嫌つたりする場合、二人はこの對象を通じて協力又は競争の關係に立ち入つてゆく。例へば國民相互の關係は相互への愛によつて結ばれるよりは少くも最初は共同の祖國に對する愛によつて結ばれる。又例へば家族は共同の先祖以來の家屋を失ふならば弛んでゆかう。

以上私はフライエンフェルスの『直接關係』と『間接關係』との區別の背景と根據とを一通り見た。社會關係を社會形象の一契機としてみる事、従つて社會形象を社會關係に還元する事を拒む彼の議論については私自ら異議をもつ。がこの點は稿を改めて關係學派の見地からして社會形象はどう扱はるべきを考ふる別の機會に譲らう。こゝでは注目の範圍を『間接關係』に限つてゆく。私
は問はう。『間接關係』の間接性とは何を意味してゐるのであるか。彼が『間接關係』といふ場合、とりあげられてゐる如き姿の關係についての重心は人と物象、又は人と抽象との間の交渉の上に存するのではなくして人と物象、人と抽象との交渉を通じて結ばれ又は離るゝ人と人との關係の上にこそおかれてゐるのであらう。重心をこの様の點におきながら猶『直接關係』に對立して『間

「接關係」の概念を措定し來る事が充分の意味をもつためには「間接性」の意味と「間接性」といふ事態のもつ重要さが充分に見通されてゐねばならぬ。彼の用意はこの點完全のものであるとはいへなからう。私は「間接關係」に於ける間接性は社會形象のもつ客觀性を通じて人と人との交渉の營まるゝ姿を意味するものと考へる。私が「直接關係」に「形象關係」を對立せしめんとしたのは「間接關係」といふ表現のもつ意味をより適切に云ひ現はさうとしたによる。

關係が形象を通じて營まるゝといふ場合、事態のうちに立入つてゆく順序は自ら二段でなければならぬ。社會形象のもつ客觀性を通じて營まる事が間接關係の間接性の眞意であるならばまづ立入るべき手掛りはこの如き客觀性といふ表現は如何様の事態を意味するか、又かくくゝの事態を有するとするならばこの如き事態を可能にする根據は生の如何なる構造のうちにひそんでゐるのであるかを考ふる事のうちに存してゐよう。これは第一段の仕事。更に進んでかく見定められた意味に於ける客觀性をもつ社會形象は如何なる意味に於て自らを通しつゝ人と人との交渉を營ましむるのであるか、直截に表現するならば社會形象を通じてといふ場合この通じてといふ事柄はどの様の事を意味してゐるのであるかを考ふる事が第二段の仕事にならう。私の小論のとりあげる問題はこの様の姿でこゝにひそんでゐる。

すでにのべた様にフライエンフェルスは社會關係の大部分のものが間接關係であるにも關はずそれは社會學的に注目さるゝ事極めて淺かつたと難じてゐる。私は既に社會關係一般に關する理論は如何なる道行の場合にも妥當しうる強さにゐねばならぬ事を誌しておいた。間接關係が社會關係の大部分を占むるにも關はず社會學的に注目さるゝ事淺かつたといふ印象を與ふる所には何等か社會學者の側における社會關係の措定に當つての缺陷がひそんでゐはしないであらうか。生の構造のもつ特異な約束との緊密な連絡に於て社會關係の概念を見定めやうとはしなかつた不用意がひそんでゐなかつたであらうか。社會關係と意識作用との關係、社會關係と時間との關係について合理的な解釋に傾く嫌がありはしなかつたであらうか。フレイヤーは私共の社會生活の重要な環境は大部分社會形象であり、この事は別に論證を要せざる所と説いてゐる。關係學がその中心概念とする社會關係の概念をしてこの社會生活の姿に對し出來うる限り豊かな説明原理であらしめるためには社會形象との關聯を如何なる姿に於てか見通しておかねばならないであらう。(註)

註。 Richard Millur-Frienfels : Allgemeine Sozial- und Kulturpsychologie (1930)

Hans Freyer : Theorie des objektiven Geistes (1928)

二、社會形象の客觀性の態様と根據。

姑く社會形象の一般的な構造と斯様な構造は生の如何なる構造の上に可能づけられてゐるのであるかを考へてみよう。私は議論をすゝめてゆく便宜のために獨斷におちいる事を意識しつつ、社會形象に關して私丈の約束を構へてゆく。(私のこの點についての考へ方は著しくハンス・フレイヤー及びテオドル・リ

ットの影響の下にありはするが全く同じ見定め方をしてゐるのではない。こゝではこの考へ方の異同には立ち入らないで置きた
い。

私の社會形象の概念は一般文化哲學に於て云々される客觀形象又は客觀精神の事實を社會學的觀念としてひきなほしたものに外ならぬ。社會學的概念としてひきなほすといふ事はこれ丈の事を意味する。客觀形象といふ場合、客觀的意味表現活動によつて客觀化の道行を通じて生れてくる『意味構成體』を理解する。『意味構成體』といふ場合、『意味』は主觀的な體驗の領域に價值として而してその故に自立自存の意味合ひに於て客觀的者として對立するものを現はし、『構成體』といふはこの如き『意味』が人格に於て又は非人格に於て、而して非人格の場合にあつては或は觀念に於て或は物象に於て、獨自の聯關を作りながら現れてくる姿を指稱してゐる。而して『意味構成

體』といふ場合、事柄の重心は客觀的な價值として主觀的な體驗の領域に對峙する『意味』の上におかれてゐる。この點については後にふれる場合がある。客觀的意味表現活動が何を意味するか、この種の活動による客觀化の道行とは何を意味してゐるかについても後にふれる。さて一應この如きものとして理解された客觀形象を一の存在として、それが社會關係とどう關聯してゆくかを考へてゆく場合、この様の觀察の側面から眺められた限りの客觀形象を社會形象として私はいひ現してゆく。従つて私の用ふる社會形象といふ表現は客觀形象中形象の成立過程に於て又はその存在過程に於て社會的性質を有するものゝみに限つて適用される如きものではない。社會關係と何等かの意味に於て關聯する限りに於ての客觀形象である。敢て社會形象の用語を用ふるのはその本質が社會的のものであらうとなからうと社會關係と關聯する側面に於て社會的なる屬性を與へんとしたからに外ならぬ。價值の領域を價值の領域として價值學的に眺めんとするものではなく價值現象として存在の領域に關聯して來る面を存在學的に捉へたものに外ならぬ。

一步を進めよう。社會形象の本質的な契機としての客觀性の意味する所を考へてみる。その場合まづ私は社會形象を生みつけてゆく活動、名づけて客觀的意味表現活動の性質を考ふる事から始めよう。

具體例に就く。私は拳を握り占めながら机を叩いて相手に話しかけるとする。その場合もとより机についての何事かに關して握りしめた拳でさし示し乍ら同時にその何事かに關しての私の感情をも表はす場合があり、然らずして叩かれつゝある机とは當體的にも主觀的にも全く無關係に握つた拳で机を叩く事によつて何事かについての私の感情のみを表はす場合が存しよう。私は今後の場合のみを念頭におく。その限りこの私の表現活動は私の感情、より一般的な表現を與ふるならば私の精神状態の表現活動である。かりにこれを主觀表現活動と名づけよう。更に他の例につく。私は雑巾がけをなしつつある婦人に机を拳で打ちながらこゝにもふかるべきものが存在する事を傳へるとする。私のこの表現活動は本質的には私の精神状態を一義的に表現せんとするものではなくして私の精神状態からは獨立に客觀的に存在する事物をさし示してゐる。この場合この種類の表現活動を客觀的意味表現活動とかりに名づけよう。敢て客體表現活動と呼ばず客觀的意味表現活動と名づけるのは當該客體の客體としてある事の中核がその客體に於て表はれる意味そのものにひそんでゐると考ふるからである。この事は後に再論する。私はかくしてクライジエス、フレイヤー、リットに倣ふて表現活動の二種類を區別した。固より具體的な生活の複雑さはこの二種のものゝ截然たる區別を許さざる場合があらう。前にとつた例の場合についても主觀の精神状態を表しつつ同時にそ

れが例へば机についての何事かを現す場合は二種類の活動が結合してゐる、又客観的な物體を示す場合にもその示し方は様々なるものがあり、この様々さは明に主観の精神状態を反映する如き場合にも二種類の活動は結びついてゐよう。又これらの総合的な活動の場合について重心が何れの側面におかれてゐるかを遽に見定めざる如き場合が存しよう。唯私は概念上の區別をといてゐるのみ。

區別の標準は主観の精神状態を表すか然らずして客観的意味を目ざしてゐるかに存してゐる。客観的意味が客観的であるといふ屬性をもつにいたる意味合ひはどの様のものであるか。「意味」の領域は「妥當」の領域である。妥當の領域として時間的制約の外に存してゐる。「意味」の「意味」としてある姿は時間の制約に超えてゐる。これに反して「意味」の領域に對立する主観の精神状態は時間の制約の下にたつ。時間の制約の下にある主観が如何にして斯様な時間の制約の外にたつ「意味」を思ひうるかは後にのべよう。意味の領域が客観的のものであるといふ意味合ひはそれが主観精神の制約である時間性に超えてゐるといふ姿を指示してゐる。かくの如くに見來る事が許さるゝならば客観的意味といふ表現はタウトロギーであるかもしれない。私は唯主観的意味といふ表現が用ひらるゝ場合「意味」といふ言葉の同一である事から來る紛らしさをさげんとしたるのみ。主

觀的意味といふは實は形容矛盾である。

私は客觀形象從つて社會形象は客觀的意味表現活動によつて客觀化の道行を通じて生みづけられてくる『意味構成體』を指すと述べておいた。客觀化の道行とは何をいみしてゐるのであるか。私はこう答へる。私は既に意味の客觀性を論じておいた。意味が客觀的な領域として時間の制約の外にたつといふのは自らの存在について又存在の聯關に於て主觀の精神過程とは獨立な原理をもつ事をいみする。然しこの如き客觀性をもつ『意味』は何等かの客體に結びついて表はれねばならぬ。何等かの形をとらねばならぬ。概念的にはそのとる客體との連絡をはなれて『意味』を考ふる事もとより可能であらう。唯具體的には何等かの客體と結びついて表れねばならぬ。何故であるか。意味が意味として表れうるのは一定の場に於てゞありこの場に於てのみそれ自體でありうるからである。價值と存在とのデアレクタクな連絡を私は考へてゐる。

意味の宿るべき場、意味の據る客體に向つて意味をそこに凝らしめてゆく道行をさして私は客觀化の道行といふ。客觀的な意味をある客體にこもらしめてゆく道行である。この場合、『意味』のそのうちにこもつてゆく客體は『意味』を宿す事によつて客觀的な存在をかちえてくる。『意味』との連絡をはなれて當初から客觀的な存在でありえてゐるのではない。（私はこの點に於てフレイヤーの社

會形象の考へ方(かなりの異論を覚ゆる。) 人々はこゝに『意味』と『客體』との連絡の相互的である姿をみねばならぬ。『意味』は『客體』に結びつく事によつて『意味』でありえ、『客體』は又『意味』に結びつく事によつて『客觀的屬性』をかちえてくるのである。これは論理的には循環をいみしてゐようと生の具體的な姿が必然に含む循環である。かくして客體の客觀性は『意味』と結ぶ事によつて始めてかちえて來うるものであるがこの客體に意味をこもらしめ客體に客觀性を與ふる道行が謂ふ所の客觀化の道行に外ならぬ。

社會形象は客觀的な意味構成體をさすものに外ならぬ。意味構成體といふ場合事柄の重心が『意味』におかれてゐる事を私はすでにのべた。『意味』が『意味』としてうけとられる事の究極のより處は『意味』の客觀性に存する事をものべておいた。社會形象の客觀性といふ事はその故に究極的には意味の客觀性をこそ指稱したものでなければならぬ。社會形象が生流動する姿に對して獨立の存在をもつといふ意味に於て客觀的であるといふのは究極的には社會形象の『意味』が生の時間的制約性にちこえて妥當しえてゐる姿をいみしてゐるものでなければならぬ。もとより意味が意味として現はれうるためには何等かの場をもたねばならず、場は意味との連絡の故に客觀性をかちえはする。だが客觀性自體をのみ考ふるならばそれは一次的には意味自體の本質的な屬性である

とせねばならぬ。

以上私は粗雑な議論の進め方に於ては、あるが社會形象の客觀性が何を意味してゐるかを略述して來た。殘された問題は、この様の意味をもつ客觀性が可能づけらるゝ如き所以の生の構造をたづねる事である。言葉をかへるならば上の如き意味に於て生の時間的制約の外にたつ客觀性を有する所の社會形象を生み出す事を可能にする如き生の構造を案じてみる事である。ある種の表現活動が客觀化の活動を營みうる根據を生の構造のうちにもとめてくる事である。

私はすでに社會形象の客觀性とは究極的にはある客體のうち宿る意味が生の時間的制約の外にたつ事をこそいみするるとした。意味が生の時間的制約の外にたつてゐるといふ自覺はそれ自身又生の活動をいみしてゐないだらうか。私共はこゝに生のデアレクタクに展開してゆく様相を思ひえないだらうか。意味の客觀性を自覺する場合、生はすでに客觀的な意味とそれに對立する生とのスバニングを自覺する事によつてより高次の姿にまで展開しえてゐるのではないだらうか。客觀性を自覺するといふ事は生と意味とのスバニングを自覺する事をいみしてゐやう。而して生と意味とのスバニングを自覺するといふ事はより高次の生の働きかけをいみしてゐるのではないだらうか。逆にいふ。このより高次の生の働いてゐる姿を考へる事なくしてはいはゞより低次の生と客觀性のス

パッシングはありえず、このスパッシングなくして客観性は客観性でありえなくなるのではないだらうか。

生の流動する姿の彼岸に客観性が自存の領域をもつてゐるといふ事は生一般の彼岸に客観性が存してゐるといふ事をいみするのでは決してない。意味の領域が客観性をもちうる事は客観性を體驗する事をはなれて可能ではない。客観性をもつ意味の領域が生の時間的制約の外にたつものでありながら、生のある種の活動がこの彼岸の領域を目ざして客観化を營みうる事の可能はこのデアレクタクな連絡の故にこそ與へられてゐる。このデアレクタクな連絡をはなれては如何にして彼岸の領域を目ざす事の可能が存しえよう。

私はこの様な意味で、社會形象の客観性が實は生一般との連絡を全くかけはなれては存しえざる性質、いな積極的表現を與ふるならば生一般の背景に於てのみ客観性として現じ來りうる性質を呼んで社會形象の體驗性と名づけよう。私がさきに社會形象の客観性を背景づける根據とよんだ所のものは社會形象の體驗性に外ならぬ。従つて私はこゝに一步立入つて客観性と生とのスパッシングを體驗する場合のその體驗の構造を案ずる所がなければならぬであらう。體驗の構造を案ずる場合、私の手掛りは體驗又は生と時間との連絡を考ふる事のうちに存してゐよう。何故であるか。私は既

に社會形象の中核的な現象である『意味』の領域が生の時間的制約の外にたつ事をいくたびか述べておいた。『意味』の領域が生の時間的制約の外にたつといふ事はなほ『意味』の領域を時間的關聯に於て規定したる姿に外ならぬ。リットは時間的關聯に於て『意味』の領域に與へらるゝ規定を『超時間』Zeitloseといふ表現を以て現した。而して意味の領域の客觀性といふ規定が究極的には時間的關聯に於て見定めえられるものとするならば（私は妥當と時間との關聯に關する至難なる問題にこゝでは立入らないておかう）客觀性の背景としての體驗性、從つて體驗の構造に立ち入つてゆくのも究極的な手掛りは又體驗と時間との關聯を考ふる事の中にこそ存してゐよう。（私はこの事を考ふる事に於てコーンとリットとヘニグワルトの著しき影響の下に動いてゐる。――註――だが稍異なる理解の仕方をとる。この點に立ち入る事を姑く別の機會に譲りたいと希ふ。）

體驗と時間との連絡を考ふる場合、私はリットのな意味に於て認識自我から區別された體驗自我と時間との連絡のみを念頭においてゆく。その限り二つの側面からこの連絡を考へる事が出來よう。一は直線的な時間の概念と體驗との連絡を考へてゆく側面、他はすでにのべた様の意味に於て生の時間的制約の外にたつと考へられた社會形象の客觀性の時間的關聯に於ける屬性とリットが考へた『超時間性』の概念と體驗との連絡を考へてゆく側面。前者から始めよう。この側面における

考察は簡潔なる形に於て『現在に幅をもつ』といふ表現のうちに盛られてゐる。現在に幅をもつといふ事はどれ丈の事を意味してゐるのだらうか。過去と未來とが現在に於て『現在』する姿を意味してゐるのに外ならぬ。過去と未來とが現在のうちに『現在する』といふ姿はもとより各々の體驗契機の特種性を抹消し去つた姿をいみするものではない。各々の體驗契機の特種性従つて契機相互の間の差別性を抹消するといふ事は體驗の展開といふ姿を無意味のものならしめよう。過去も未來も現在に於て『現在する』といふ姿は各體驗契機が各々の特種性を保有しながら現在のうちにアウフヘーベンされる姿をこそ意味してゐる。各契機が各々の特種性を保有しながら現在のうちにアウフヘーベンされるといふ姿は各契機が體驗の現在を中心としていはば次第に明瞭の度合を減じながら二つの方向に於て、即ち一は過去に他は未來に連絡づけられてゐる姿を示してゐる。より直截な表現を與ふるならば體驗の現在が體驗された事柄と體驗されるであらう事柄とを “in einer Abstufung des Vorder- und des Hintergründlichen” に合はせ攝る姿をいみしてゐる。直線的時間概念との連絡に於て考ふるならば體驗が直線的時間を止揚しえてゐる姿をいみしてゐる。いふ意味はこうである。直線的時間概念の約束は如何なる姿のものであるかを考へてみる。直線的時間に於て持續は繼起の形をとる。繼起は純粹である限り延長なき點の連なる姿でなければならぬ。延長をも

つといふ事はすでに直線的時間の直線性に背く。延長なき點の連なつてゆく姿は點と點との間の何等かの『意味』ある連絡を完全に排除する姿をいみしよう、何故であるか。延長なき點と點との間は又延長なき區劃がわかるゝのみでなければならぬからである。延長なき區劃を以てへだてらるゝ所、點と點との間に意味の連絡はありえず、意味の連絡の存せざる所、過去、現在、未來といふ云ひ現はしは充分な意味に於て存しえぬとみななければならぬ。すべての點は唯『現在』としてのみ、しかも幅なき『現在』としてのみあるにすぎぬ。(この場合不十分な意味に於てのみ『現在』するものにすぎぬ事はいふまでもないであらう。充分な意味に於ての『現在』は二つの方向に於ての背景との連絡のうちのみ考へられるものだからである。)さて着眼を體驗の『繼起』する姿の上に向けてみる。體驗はこの如き直線的繼起のうち『繼起』してゆくものなのだらうか。もし然りとするならば體驗の『繼起』は幅なき點と點との連なるにすぎざる形をとり、而もその事の故にその間に全く何等の意味をも有せざる連續の形をとらう。而してこの如き姿のものとして體驗の『繼起』があるならば體驗である事さへも不可能になり終らう。體驗が何等かの意味ある内容をもつ事は全く不可能になり終らう。もはや存せざる幅なき點と未だ存せざる幅なき點との間の幅なき區劃といふ姿が體驗自體の時間的制約であるならば現在の姿も又幅なきものの外ではありえざるに到らう。然らずして體驗の姿は『現在が幅をもつ』事を

おしへる。幅をもつといふ事は直線的時間概念における無と無との繼起の約束にこえてゐる事をいみする。

筆をすゝめて第二の側面に考察を向けやう。私はすでに社會形象の客觀性の究極のより所は體驗性に存する事をのべておいた。より高次の生がいはゞより低次の生と社會形象とのスバニングを體驗するといふ姿をはなれては社會形象の客觀性が客觀性として現じうる事は不可能であると述べておいた。體驗性の背景に於て始めて客觀性が現じうるといふ場合、より低次の生と社會形象とのスバニングを自覺しつゝあるより高次の生は如何なる時間的構造をもつてゐるのであらうか。私は曾て社會形象の客觀性は究極的には意味の客觀性であり、意味の客觀性は又究極的には生の時間的制約の外にたつ姿、リツト的表現をかりるならば『超時間』といふ屬性を與へられる姿をいみしてゐる事をのべておいた。より低次の生の時間的制約と社會形象の超時間性とのスバニングを自覺する所のより高次の生は如何なる時間構造をもつ事によつてこの様の自覺を可能にされてゐるのだらうか。リツトは私が上にみた様の生が直線的時間の制約の外にある姿は生の本質的な時間規定が體驗時間のそれに外ならぬ事を示してゐると考へ、この様の體驗時間は曾て直線的時間を自らのうちにアウフヘーベンした様に自らは又『超時間』のうちにアウフヘーベンされてゆくものとするが如く

である。だが私は思ふ。體驗時間が超時間のうちに止揚されてゆく場合、そこにも必ず存してゐるであらう生の活動は如何なる時間的屬性を示してゐるのだらうか。體驗時間がそのうちに止揚されてゐる超時間といふ姿がそのまま客觀性とより低次の生とのスバニングを自覺しつつあるより高次の生の時間的屬性であるとする事が許されるだらうか。社會形象の客觀性に重心をおく限り體驗時間は超時間のうちに止揚されるといふ姿が前面に浮んで來よう。だが幾度びか繰り返した様に社會形象の客觀性は體驗性にうらづけられてのみ可能であり、この事實に重心をおく限り超時間が逆に體驗時間のうちに止揚されてゐる姿が前面に浮んでこねばならぬ。論理的には矛盾してゐる様にみえようと一歩立入つてこゝいはれなければならぬ。即ち體驗時間が超時間のうちに止揚されるといふ事の可能は體驗時間が超時間を止揚する事に依つてのみ可能でなければならぬ。客觀性の姿は超時間が體驗時間を止揚する姿をいみしはするが客觀性のこの様の姿を可能にするものは體驗性であり、體驗性が客觀性を可能にするといふ姿は體驗時間が超時間を止揚する姿をいみするものに外ならないからである。この様の考への進め方が著しく非論理的のものである様にみえるならばそれは生の構造のもつ『兩極的構造』(デイルタイ)と、生がスバニングを通じて自らを展開してゆくダイナミク的な姿に思ひ到らない故ではないであらうか。

私はこれまで導いて來た議論の立場からふり返つて曾て煩雜に流れる事をおそれて無雜作に云ひ現しておいた生の時間的制約といふ言葉とその如き時間的制約の外に「意味」がたつといふ言葉について若干の事を附加しておかなければならない。社會形象の客觀性に對立せしめて考ふる限りに於て生の時間的制約の姿を云々する場合、私は唯生が直線的時間の規定をこえてゐる丈の、従つて超時間的規定との何等の連絡をも考へ入れる事なくしての時間的制約を考へてゐた。従つてこの様の姿に於ける時間的制約はこの限りに於ては生の時間的制約のすべてを云ひ現したものではなかつた。その一半をしか云ひ現したものでなかつた。云ひ残された一半は超時間を止揚しうる姿のうちに存してゐる。直截に云ふならば『兩極的構造』を考へのうちに入れての生の一般的な時間的規定はこうである。生は一方に於て直線的時間を止揚してゐると同時に他方に於て超時間をも止揚しえてゐる。この様の姿を示す生の時間的構造を私は體驗時間の事實と名づけよう。體驗時間の事實が直線的時間をも超時間をも止揚しえてゐる姿は、一方、直線的に繼起する各契機の全くの「Punktualität」を征服しえてゐる姿を示すと同時に他方、超時間的な屬性をもつものも實は生一般との連絡を背景としてのみ超時間的のものでありうる姿を示してゐる。

以上私は極めて粗笨な形に於てははあるが社會形象の客觀性の意味する所と、か様な意味での客

觀性が如何なる生の構造のうちに可能づけられてゐるかをみて來た。そして客觀性が實は體驗性にうらづけられてゐるといふ事をのべ、か様な連絡の可能は生の體驗時間の構造を物語つてゐる事を見ておいた。客觀性が體驗性にうらづけられてゐるといふ事こそ社會形象と社會關係との連絡をみてゆく最も重要な手掛りてなければならぬ。筆を改めよう。

註。Johnas Cohn; Theorie der Dialektik. 1923. Theodor Litt; Individuum und Gemeinschaft. 1926
R. Höningwald; Die Grundlagen der Denkpsychologie. 1925.

三、『意味』の領域と社會關係。

社會形象の客觀性について若干の事を私は述べておいた。意味構成體の領域は意味のもつ客觀性の故に生の流動する姿に超え、自らの法則に従ふての自らの存在を保ちえてゐる。意味をある客體のうちこらしむるべく私の所謂客觀化の活動を營む種類の表現活動は生の流動する姿と絶縁し去る方向を意圖してゐる様にみえる。意圖する方向は主觀の精神状態に對して何等の關聯の跡をも残さざる客觀世界へのそれである様にみえる。その限りすてにつくられた社會形象をうけとつて理解しようとする側の人の努力——理解の活動も精神状態に何等關はる事なき客觀的な意味の關聯を跡

づける事に止つてゐる様にみえる。社會形象を作り出す努力に於て主觀精神の姿が意味の領域のもつ独自の法則の前に撥無しさらねばならなかつた様に、社會形象の介在は人と人との關係を隔てさへぎつて了つた様にみえる。而も社會生活の現實はいかに多くの社會關係が社會形象を通して營まれてゐるかを教へてくれる。社會形象の領域が客觀的な意味構成體の領域でありながらこれを通して社會關係が營まれる事の、更には大部分の社會關係がかく營まれる事の可能の根據はどこにひそんでゐるのだらうか。私はすでに社會形象の客觀性が實は體驗性の背景の上に始めてありえてゐる姿をくり返しのべておいた。重要な手掛りはこゝにひそんでゐる。

私は二つの種類の表現活動を一應區別しておいた。區別の根據は主觀の精神状態を現はすか然らずしてそれには關はる事なき意味の領域を目ざしてゐるかに存してゐた。だが私はすゝんで生のもつ本質的な契機としての『兩極的構造』への顧慮に於て主觀と『意味』とのスバニングの自覺といふ姿のもつ意味を考へ、より高次の生の姿がそこに活動してゐる事を説いた。こゝにまで到りえた見地からふり返つて眺めるならば主觀の精神状態と關はる事なき客觀的意味の領域を目ざすといふ姿は全く生との連絡なき世界を目ざす事をいみしてゐるのでは決してありえぬ事を思ひ直さねばならぬ。より高次の生の見地から眺むるならば主觀の精神状態から絶縁して客觀的意味の領域を表現

せんとする努力は又それ自體生の表現への努力をいみするとも考へられねばならぬ。丁度主觀の時間的制約の外に意味の妥當がたつ超時間の姿が再び實は體驗時間のうちに止揚されてゐたと同様に。客觀的意味の領域を表現する事がやがて又生自らの表現であるといふ事は生が『兩極的構造』をもつといふ事と、又客觀性が體驗性によつて背景づけられてゐるといふ事と、全く同一の機構を示したものにすぎない。もとより私は意味の領域を表現しようとする活動は屢々意味の領域に内在する独自の法則の故に主觀の精神状態との激しきスバニングを経験せねばならぬ姿を全く考慮の外においてゐるのではない。だがこのスバニングは生の展開の一動力をなしてゐるものではないだらうか（リット）。又指定せられた客觀形象はその含む独自の“Bündigkeit”（フレイヤー）の故に充全な姿に於て生の表現であるとは云ひえなからう。だがこの姿——生の充全な表現ではありえないとの自覺は又一つのスバニングとして生を展開せしめる一動力をなしてゐるのではないであらうか。生のたえざる展開を、いはばデアレクチックな展開を思ふ限り生の充全なる表現といふ姿は全く考へえない筈でなければならぬ。“Spricht die Seele, so spricht, ach, schon die Seele nicht mehr.”の眞意を考へてもみよ。私の着眼は生のデアレクチックな構造が本質的に許さざる充全なる表現といふ姿の上におかれてゐるのではなくして生の何等かの表現の上にこそおかれてゐる。その限り意味

の領域に於ける表現は又それ自體生の表現でありうる。

一步を進めて考へる。客觀的な意味の領域が同時に又生の何等かのいみでの表現でありえてゐるのは意味の領域のもつ “Bündigkeit” 若しくは “Sachlichkeit” の姿においてある。當體的のものである事の故に生の充全な表現ではありえずになつてゐるが同時に又當體的のものである事の故に生の何等かの度合に於ての表現が他の人の生の前に然らざる道行をとる表現の場合に較べて、より捉へられ易き、より近づき易き形に於て存してゐる一面を考慮しなければならぬ。概念が思惟の經濟をもたらしめてくる様の姿にも似た機構がこゝに現れてゐる事を考慮しなければならぬ。よし不充分な形においてある社會形象による生の表現は社會形象のもつ當體性の故に多くの人々が時と所と異にして之を理解しうる共同の表現手段によつてゐるものである事を考慮しなければならぬ。この限りに於て社會形象のもつ客觀性の故に社會關係の營まるゝ圏が擴大され（空間的に）延長されてゐる（時間的に）姿を思ふべきである（ジムメル）。だがこの姿を明瞭に見定めうる爲めにはなほ一つの準備を必要とする。

社會形象を作りだしてゆく活動は客觀的な意味の表現を目ざしておりながら客觀的な意味の表現は又生の表現でありうる機構をといつておいた。着眼をこの様の社會形象をうけとる側の人々の活

動の上に向けてみる。その場合、うけとる人の活動は單純に何等かの客體のうちに籠められた意味——客觀的な意味のみの跡づけに止つてゐるのだらうか。私は再び社會形象の客觀性が體驗性に裏づけられてゐる姿を思ひ起してこねばならぬ。意味の表現を通して生の表現がなされてゐる姿を思ひ起してこねばならぬ。その限り客觀的な意味の跡づけは體驗性にまで生の表現にまで連關してゐるといへないだらうか。もとより意味の領域のもつ「Bündigkeit」は原本的な製作者の體驗、その生の表現をそのままに意味の領域をうけとる側の人の理解のうちに再現せしめる事を不可能にしよ。丁度意味の領域に於ての生の表現が前者のもつ独自の法則の故に完全な意味での表現ではありえなかつた様に、意味の領域をうけとる人の理解作用も完全な姿に於て意味の背後に存する體驗性にまで迫りえはしないであらう。唯私はこう思ふ。客觀性と體驗性との連絡は生の『兩極的構造』のデアレクタクな展開の姿を示すものであり、この様の生の姿は生の本質的な機構としてあらゆる生に通じて妥當する根本的な姿でなければならぬ。客觀性と體驗性との連絡が一義的のものである、この一義的な連絡があらゆる生に通じての一義的な生の構造を示してゐるものであるならば、客觀性をうけとり跡づけてゆく作用は客觀性と一義的の連絡にある體驗性にまで及んでゆかねばならぬ。ノヴァリスは云ふ“Wir wissen etwas nur, insofern wir es ausdrücken, d. h. machen können.”

自ら意味の領域への客観化を營みうるものは意味の領域が體驗性にうらづけられてゐる事を體驗してゐよう。その限り意味の領域への客観化をなしうるものゝみが他人の手になる意味の領域をあとづけうるといふのは客観性のあとづけが體驗性に背景づけられてゐるといふ姿、意味の理解が生の表現への理解にまでたち入りえてゐる姿をいみしてゐないだらうか。一步立ち入つていふ。客観性と體驗性との連絡は一義的のものであり、この一義的な連絡はすべての生に通じて妥當する。私共はこゝに意味の領域を作り出す人の側における體驗性と、意味の領域をうけとる側の人々に於ける體驗性とが一義的に少くも方向を同一にしてゐる事に思ひいたらなければならぬであらう。(性質に於て範圍に於て完全に相蓋ふといふ姿では勿論ない。) 少くも方向を同一にする所に互ひに相向ふてゐる氣組をみとりえなければならぬ。方向を等しうするといふ事はこの場合では意味の領域へ同一の意向に於て向ふてゐる姿であり、意味の領域へ同一の意向に於て向ふといふ姿は意味の領域を通じて二つの生が關聯し合ふてゐる姿を意味してゐよう。『間接關係』の中核はこゝに存してゐる。

もとより社會形象のもつ當體性は、而してより究極的な表現を與ふるならば生のデアレクチックな『兩極的性質』の構造は、客観性と體驗性との連絡の一義的であるにも係はらず完全な融合相即を妨げよう。だがこの妨げは再び生を展開せしめる一動力としてのスパニングの姿に外ならないと私

は思ふ。意味の領域を通じての二つの生の關聯が一義的のものであり乍らに完全に相蓋ふ事を許さざる姿は意味の領域を通じての生と生との關係に展開の動力を與ふるスバユングの姿に外ならないと私は思ふ。

社會形象が社會關係の圈を擴大延長せしめてゆく姿は社會形象が共同の意味構成體である故に可能にされてゐるのであるが共同の意味構成體が社會關係の圈を擴大延長せしめる事の可能は客觀性と體驗性とのスバユングにも關はらざる、否正しくはスバユングの唯中にあつての一義的連絡といふ姿のうちにこそ根據づけられてゐる。

稍考察の方向をかへる。人と人との居對ふ場合、相黙して動かざる場合がある。相黙して動かずと雖も關係は營まれてゐる。動きなき沈黙が一定の意味を相手方に傳へるからである。相手方は沈黙に於てある意味をうけとる。このうけとられた意味は相手方によつて他の人々の間に傳へられてゆかう。だが第三者に傳へらるゝ場合、當事者の間に行はれたと同じ沈黙の形において傳へらるゝ事はありえない。何等かの沈黙以外の表現手段に訴へざるをえないであらう。沈黙といふいはゞ消極的な表現手段による意味の傳達はこゝに限られた限界をもつてゐる。多數人を相手にする沈黙のもつ意味も沈黙の道行によつては第三者に傳へられえなからう。他の場合を考へる。人と人と居對

ふて、言葉の上では黙してゐると雖も例へば机をはたいて感情を表し合ふてゐる場合、机をはたく動作のうちにもられた意味はそれを表すと全く同じ動作において當事者以外の第三者に傳へられうるだらうか。聾啞者の場合、原始的な動作と全く同じ動作しかもそのみで第三者に意味が傳へられうるだらうか。何等の説明的動作の加はる事なくして傳へられうるとは考へられない。説明的動作の加はるといふ事は原始的な動作のみをもつてしての意味傳達の限界の狭さを示す。更に他の場合を考へる。人と人と相對ふて互ひにある意味を表して机をはたきつゝ言葉を交し合ふとする。意味は言葉にも動作にも等しくもられてゐる。この意味が、が然し第三者に傳へらるゝ場合、傳達の手段の重心は言葉の側におかれる。もとより原始的な動作がそのまま原始的な言葉と共にくり返されはしよう。だが傳へられる第三者が傳へられる意味を理解しようとする關心はまづ言葉の上に、少くとも言葉を通して動作の上に向ふ。動作による傳達が局限されてゐるからである。處で言葉は社會形象である。言葉のうちにくままれてゐる約束が原理的には各人を通じて普遍に妥當する如き意味構成體である。言葉のもつ約束が各人に通じて共通でありうるのは言葉が當體性をもつてゐるからである。當體性をもつといふ事はより低次の生の主觀的な „Schwung“ の外にこえてゐる姿をいみする。當體性をもつ事の故に言葉による意味の傳達は廣き範圍にわたらう。意味の傳達が廣

き範圍にわたりうるといふ事は關係圈の廣き範圍にわたりうる事をいみしてゐる。

言葉についてのべた上の如き機構はそのまゝ社會形象一般に妥當する。にも關はらず言葉と言言葉以外の社會形象との間には本質的な區別が生表現といふ事柄との連絡の點に於て存してゐるよう
にみえる。言葉にあつては言葉が生表現の手段、したがつて表現さるゝあるものの立場からして
は附加的な形式にすぎぬといふ印象は比較的におこりにくい。言葉の中に生そのものが展開してゆ
くといふ姿、いはば表現手段の唯中に被表現者が展開してゆくといふ姿、表現さるゝ者まづ定まつ
て第二次的にのみ外部的な形式のうちに入りこんでゆくのではないといふ姿が、比較的容易に理解
され易い。それに反して言葉以外の他の社會形象にあつてはこのいはゞ緊密な連絡は破られてゐる
様にうけとられ易い。私はこのうけとられ方の相異を次の様に理解する。意味構成體といふ場合、
事柄の重心は意味が客觀體にこもる事に存する事を私はすでにのべておいた。而して意味のその中
にこもる客體は意味との連絡においてのみ當體性をかちえてくる事をものべておいた。究極的には
社會形象の客觀性は意味の當體性に還元されうる事をものべておいた。この點は凡ゆる形象につ
いて事情を等しうする。唯異なるは客體の相異のみ。客體は人格である事があり、非人格である事
があり、非人格の場合にあつても抽象である事があり物象である事がある(既出)。何れの客體とい

へどもそのもつ客観性の究極のより所は『意味』と連絡する事のうちに従つて『意味』の客観性に
ひそむ。だが客體の相異は相異なる客観性を印象せしめる。『意味』との一義的な連絡に於てのみ
客體の客観性がありうるならばこの後者のものが相異なる客観性を印象せしむるといふのは連絡づ
けらるゝ『意味』の客観性の相異に基くものであるか。しからず客體の側におけるこの如き相異は
一に體驗自我の立場にたゞしむるか認識自我の立場にたゞしむるかとの相異をもたらしむる如き客體
の性質そのものの相異にもとづく。客體は人格的である場合よりも非人格である場合に、更に立入
つて云ふならば人格的である場合よりも抽象的であるか物象的であるかの場合に、更には又抽象的
であるよりも物象的である場合に、より多く自然科学的な認識自我の立場を可能にせしむる。而し
て認識自我の立場にたゞしめてゆく方向は居對ふ客體を所謂冷たき主客關係に於て客観化せしめて
ゆく方向をいみしてゐる（リット）。而してこの如くにして措定せられた客観性は意味と連絡する
事によつてかちえられてくる本來の客観性と結びついて逆に當該客體にもられた『意味』の客観性
に本質的の相異なるかの如き印象をおこさしめてゆく。例へば王冠が王黨の人の前に現ざる客観性
と王冠を學者が外面から眺むる場合に現ざる客観性との相異は體驗自我の立場によるか認識自我の
立場によるかの相異をいみする。何れがより實在性をふくむ客観性であるかと問ふならば前者の場

合と答へる。認識自我の立場にたつといふ事は實在性について語りうる領域から脱去する姿を意味してゐるからである(リット)。

私はかくして實在性を有つ客觀性の領域はその生の表現との連絡に於ては言葉に於てみたと同様の機構をもつ事をといた。異なる機構をもつと印象さるゝ場合は認識自我の立場よりする非實在的な客觀性が考へ入れられた場合にすぎぬ事をといた。こゝまで到りえた私共は『間接關係』の間接性を、普通に人々が與ふる意味に於てよりも遙かに“relativieren”して考へなければならぬであらう。形象を通してといふ場合の通してといふ表現をメカニクな意味以上の意味をもつて考へなければならぬであらう。間接性の故に極めて限られた範圍内に於ける關係の姿のもつ聯絡の密接さは失はれてゐるが反面に於て間接性の故に關係の及ぶ範圍が擴大され従つて人との交渉に於て始めて存在しえ、展開しえられる生の姿がより豊かに展開しゆきうる可能の與へられてゐる事にも着眼しなければならぬ。認識自我の立場をとる事によつて必然的に指定されてくる主客關係に於て眺められた客觀性とは獨立に體驗そのものの中にあみこまれてゐる客觀性をみとつてくる所がなければならぬ。